

植物園を三度目に訪れたのは昨年 10 月である。おもな目的は隣接のハレ市において開かれた植物ホルモンに関するシンポジウムに出席することであったが、統一後のライプチヒの変化をこの眼で見たいという興味もあった。この機会に 450 年を迎えた植物園についてミュラー教授らに話をきくことができたのは幸運であった。

ミュラー教授は植物園の今後の発展のための青写真をもち、その夢を語ってくれた。反面、ペツファー、ルーラント以来の伝統をもつ植物生理学教室の席はシュスター教授の退官後、後任人事が難航し、まだ決まっていない。統一後 2 年を経た現在も旧東ドイツと旧西ドイツの格差は大きく、給与、設備、住宅など大学人事にも影響が大きい。統一後、西側では税金が上がり、東側では物価上昇に給与上昇が追いつけず、大学の研究費も不十分で両者とも大きな困難に直面している。一部には統一に対する後悔と疑問も大きくなりつつあるときいた。

もとのライプチヒ大学に戻った大学植物園のイチョウが成長し、植物園と植物学教室が昔日の繁栄を一日も早くとりもどすことを祈るのみである。(岩波書店「図書」1月号、13-17頁、1993)

## 「リューベック市役所訪問記」

### 1. リューベック市長を訪ねる

朝から霧雨の降る、しかし穏やかで明るい朝であった。ハンザ都市リューベック (Lübeck) 駅で汽車を降り、駅舎を出て徒歩で有名なホルステン門を過ぎ、市役所へ向かった。市役所前のマルクト広場には霧雨のなか、市が立っていた。広場と反対側の市役所玄関に回ると、そこには日の丸が掲げてあった。どうやら私の市役所訪問のためらしい。ホール受付で用件を次げると、「ヘル、プロフェッソール、ドクトール」と 2 階の市長室へすぐに案内してくれた。中世以来のすばらしい市役所の建物にしては簡素ですっきりした市長室でブテイヤ (Bouteiller) リューベック市長は私をにこやかに迎え、椅子をすすめ、自らコーヒーをいれてくれた。1 時間あまり懇談したのち、私は茨木市役所から託されたパンフレットなどの資料をリューベック市長に渡した。これに対し、ブテイヤ市長は山本茨木市長に見事なリューベック市の写真帳を託し、私にも 1 冊恵与してくれたうえ、近く山本市長へ返書を送ることを約した。ついでながら、茨木市もパンフレットくらいでなく、リューベックのように、文化都市らしい英文の本を作るべきだと感じた。

### 2. ことの起こり

それは 8 月 29 日 (土曜日)、倶楽部 2 階食堂において茨木市体育協会主催の第 18 回市民ゴルフ大会表彰式が開かれたときのことであった。引き続いておこなわれた懇親会において樋口義明社会公益委員と私が山本茨木市長、千葉助役と懇談していたとき、リューベックが話題になった。「とても綺麗な町ですよ」と私が言ったのがきっかけになった。10 月には会議などでドイツへ行く予定だった私は、ハンブルクへ行くついでに 30 年振りでリューベックを訪ねてみようと考えていた。このことを聞いた市長、助役は、できたらリューベック市長を訪問して貰えないか、と私に打診があった。その理由はつぎのとおりである。数年前、前茨木市長の時代、茨木市はリューベック市と姉妹都市関係を結ぶ、という話が持ち上がったそうで、市長らの一団

がリュubeck市を訪問した。その時は話が纏まらず、そのまま現在に到った。現在のところ、とくに姉妹都市という計画は残っていないが、市長も山本末男氏に変わったので、以前のいきさつからこのさい新市長がリュubeck市長に親書をもって挨拶をしておきたい、ということであった。

### 3. リュubeck訪問

私の出発が近づいた9月末、市長公室の係官が来宅し、リュubeck市長訪問について打ち合わせが始まった。私は、友好関係を結ぶためには何か中心課題を持つ必要がある、と建言し、たとえば、ノーベル文学賞を軸に文化的友好関係を持つのはどうであろうかと示唆した。リュubeckはトマス・マンをもち、茨木は川端康成を誇っている。こうして両市間で私の訪問に関する段取りが進められた。私は10月9日、ルフト・ハンザ機で大阪を出発した。ボン、ハレ、ライプチヒにおける研究打ち合わせや会議などを終えたのち、10月18日にライプチヒからハンブルクへ飛び、翌19日、ハンブルク駅から汽車で約1時間、バルト海に面するハンザ同盟の盟主都市、「商人の仲間」を意味するリュubeckに赴いた。ヨーロッパで在外研究中に一度訪れた30年前のリュubeckと殆ど変わらぬ中世の面影を残した町並みは私に当時の日々を思い出させた。

### 4. リュubeck市長の話

市長室でまず私が山本末男茨木市長の親書をブテイヤ市長に手渡すと、市長は英文で書かれたその手紙を私に読んで聞かせてくれ、その趣旨はよくわかったと言った。次に市長が私に茨木市についていろいろ質問したので、約10分間、歴史、地理的位置、人口、文化などについて私の知る範囲内で説明した。ブテイヤ市長は次にリュubeckが統一前後から北ドイツで置かれている状況、とくに統一後のやや困難な状況について説明してくれた。

リュubeck市はシュレースウィッヒ・ホルシュタイン州にあるが、東西統一によって隣接する旧東ドイツのメックレンブルク・フォルボンメルン州と近い関係になり、このため同州のシュヴェリン (Schwerin) やヴィスマール (Wismar) と近隣都市となったわけである。したがってリュubeckは政治的にも経済的にも、これらの市と協力することが必要である。かつてのハンザの盟主リュubeckも現在では昔日の経済的繁栄はなく、この地域の一員として生存を計らなくてはならない。したがって、茨木市としてもリュubeckを単に一都市としてでなく、この地域の一都市として考慮してほしい。

このように語ったブテイヤ市長は、その名からもわかるように、フランス系のドイツ人であるが、流暢な英語で話してくれた。

以上のリュubeck市長の話に対して私は、市長の考えは一茨木市民としてはよく理解できると答えた。というのは、茨木市も京阪神地方の一都市で、この地域の一員として発展すべきという点においてはリュubeck市と全く同じ立場である、と意見を述べた。しかし、このような両市の政治、経済、社会についてリュubeck市長と論ずる資格も権限も私は持たないので、機会を見て是非来日し、茨木市長と会ってくれるように、とブテイヤ市長に歓迎の意を表した。私の帰国後、同市長は山本市長に返書を送ったと聞く。

このあと、ハンザ都市となった1226年に着工の素晴らしいゴシック建築で、リュubeckの名

所の一つでもあるこの市役所 (Rathaus) 内の議会場、会議室などを助役が案内してくれたが、長い歴史を感じる見事な中世の建物内部であった。市長に別れを告げ、霧雨のあがった町へ出た。午後はリュック観光に費やし、同行した家内に町のあちこちを説明し、夕刻ふたたび汽車でハンブルクへ帰った。

## 5. 統一後のドイツ

今回私は西ドイツ各地のほか、旧東ドイツでは会議の開かれたハレ、ライプチヒその他を訪ね、統一後の変化を見たり、各地の同業の大学教授や家族、友人たちといろいろと話す機会を持った。私の予想に反し、ハレは相変わらず埃っぽく、建物も汚れたまま、空気は煙臭いなど、15年前と殆ど変わらなかった。ライプチヒも5年前と大して変わったようではなかった。人々は統一後の期待が大きかっただけに、現状に対する失望も大きく、失業率も増え、物価上昇に伴わない給与など不満が大きくなりつつあるようであった。

他方、旧西ドイツでは、旧東援助や難民問題などのため、税金が上がり、ここでも不満が大きくなりつつあるとのことであった。たとえば、私の友人たちは、大学における研究費や旅費が大幅に削減され、どうして研究を続ければよいか判らない、と嘆いていた。また、旧東は西にとってお荷物以外の何物でもないとはっきりいう人もいた。こうして旧東西の人々の相互不信がどんどんと顕在化しつつあるようで、今後のドイツは問題山積という印象を持った。

40年余り住んできた茨木市に何らかの奉仕ができれば、とこの役目をお引き受けしたものの、果たしてお役に立ったかどうか心許ないが、私としては思いがけず貴重な体験をさせて頂いた。茨木市が今後、リュックの友好都市として恥ずかしくない国際感覚を身につける努力を払うことを期待する。(IBARAKI No. 449: 23 - 25, 1993)

## 6. 歴史、人物

### 「ステファン・ヘイルズの墓の修復」

去る1982年10月、当時の藤茂宏会長のもとにカリフォルニア大学のEric T. Pengelley教授から手紙が届いた。実験植物学の創始者といわれるイギリスのStephen Halesの墓を修復するという計画に賛同して拠金してほしいというものであった。Pengelley教授は目標総額として6,000ドルを見込み、このうち4,000ドルはアメリカ植物生理学会が出すべく努力中であり、ある個人が100ドル出した、と書いてきた。そして日本植物生理学会は500ドル程度拠金してもらえればありがたい、とあった。

藤茂会長はこのことを常任評議員会にはかった。拠金に応じる必要がない、というものから、国力と学会の財力からみてかなりの額を出すべきだ、というものまでいろいろな議論が出されたが、結局、本学会としては1,000ドル拠出することにきめ、その年の12月に藤茂会長はPengelley教授にその旨返事をした。現在の円高と違い、当時の金額として日本円で約30万円くらいであった。このことは1983年の評議員会で報告された。